私はこの「タイランド」の主題は「苦しみを取り除く為にはどうしたら良いか」「本物のコミュニケーションをとる為にはどうしたら良いか」の2点であると考える。本稿ではこれを各種「謎」を解きながら論証していく。

「苦しみを取り除く為にはどうしたら良いか」

　最初に「苦しみを取り除く為にはどうしたら良いか」についてだ。最初に私が注目したのはニミットの「一旦言葉にしてしまうと、それは嘘になります。」（p144l10~11）「言葉をお捨てなさい。言葉は石になります。」（p144l14）だ。

　まず、「一旦言葉にしてしまうと、それは嘘になります。」というのは言葉では真実は伝わらないということだ。言葉を通した時点で、自己の枠組みでとらえた事象とは異なってしまう。さらにはその言葉の捉え方も相手によって様々である為、相手に自分の考えていることを伝えるまでには、二度別のフィルターを通らなくてはならない。このように、言葉では自分のことを伝えきることができないということをわかっているニミットは、さつきにそれを言葉にさせないようにしたのだ。

　続いて、「言葉をお捨てなさい。言葉は石になります。」についてだ。まず考えなくてはなくてはならないのが、ここに出てくる「石」とはなにかということだ。さつきはニミットにつれられて老婆のもとにもとにいくわけだが、そこでもさつきは老婆に「あなたの体の中には白い石が入っている」という指摘を受ける（p139l6~14）。おそらくこの部分での石と同じものであろう。さつきは十代の頃に義理の父親にレイプされた経験があると推測できる（本文から推測できる。授業内でも取り扱った為、割愛。）。それが原因で、さつきは30年以上神戸に住んでいるその男を憎み続けている。私はこの憎しみが石では無いかと考えている。老婆の指摘によれば、石には日本語で文字が書いてあり、ずいぶん昔からあるようだといっている。ここから考えても、憎しみが石であると考えるのは妥当であるといえる。では、どうして「言葉は石になる」のか。これについて私は、言葉にすることによってさつきが憎しみに関する認識を顕在化してしまうことを避けるという目的があるのではないかと考えている。言葉は相手に対して表面上のものを伝える手段であるが、そのぶん言葉にしてしまうと悩みが表面化してしまうことが考えられる。よって、ニミットは「言葉をお捨てなさい」といったのだ。

　ここまでで苦しみは「神戸の男を恨み続けていること」で、それが「石」としてさつきの心に残ってしまっていることがわかった。では苦しみ―さつきのこころにある「石」を取り除くにはどうしたら良いのだろうか。

　そこで私が注目したのは老婆のさつきに対する言葉だ。老婆はさつきに対して「あなたは近いうちに大きな蛇の出てくる夢を見るでしょう。……その蛇があなたの石を飲み込んでくれます。わかりましたね」（p140l3~9）と語っている。要約すると「夢の中で出てくる緑の大蛇があなたの石―憎しみを食べてくれます。」ということだ。ニミットもこれに関して「夢を待ちなさい、ドクター」（p144l13）といっている。一見すると全く意味が分からないが、ニミットのある言葉に注目することによってわかってくる。

　ニミットは文章中で「生きることと死ぬることは、ある意味では等価なのです、ドクター」（p142l5）「私はもう半分死んでいます、ドクター」と語っている。この二つの言葉について考えてみよう。まず、「生きることと死ぬることは、ある意味では等価なのです、ドクター」についてだ。この部分におけるポイントは、一般的に死の方が悪とされがちな生と死の関係を同一平面上にとらえられている点だ。認識・思考することを「生」、認識の範囲外にあり、思考しないことを「死」としてとらえた場合、無意識のうちに思考しているがしっかりした認識はできないという状態の「夢」は生と死の境界線ととらえることができるのでは無いだろうか。すると「私はもう半分死んでいます、ドクター」というのはニミットが既に自己の枠を半分夢に食わせているからであるととらえることができるのではないだろうか。

　では「蛇の夢」について考えていこう。先ほどのニミットの言葉に関する考察から、ニミットは既に自分の苦しみを夢、つまりは無意識に食わせていると考えることができる。今回の蛇は壁の中から現れるわけだが、その壁が夢だとすれば、壁の内側が生＝認識、外側が死＝非認識ととらえることができる。そして蛇は壁の外側から現れる、つまり認識外にあるということの象徴であるといえる。ここから石を蛇に食わせるということは「憎しみを認識の外におく」と考えることができる。すなわち、苦しみを取り除く為にはそれ自体を認識の範囲外に置くことが必要であると言える。また、私はこの蛇の夢はもう一つ重要な意図を有していると考えるが、それについては授業で一切触れていない自論であるため、後に説明する。

「本物のコミュニケーションをとる為にはどうしたら良いか」

　次に「本物のコミュニケーションをとる為にはどうしたら良いか」についてだ。前述した通り、言葉では深層部分を伝えることはできない。しかし、この作品には深層でのコミュニケーションについても記述されている。それは北極熊（以下シロクマ）に関する記述だ。ニミットはさつきに対して主人が語ってくれたシロクマの話をしている（p145l15~p146l15）。シロクマはコミュニケーション能力を持たず、基本的に孤独に生活し、交尾だけを行い、逃げ去る。これについて、ニミットは「北極熊はいったい何の為に生きているのですか」と聞くと、主人は「それでは私たちはいったい何のために生きているんだい？」と尋ね返した。

　私がこの部分で注目したのは「私たちは」という部分だ。あえてごま点で表現していることからシロクマは「私たち」と対比させた表現ではないかと考えた。私はこの対比については二つの捉え方があると考える。まず一つ目は「シロクマは相互コミュニケーションがとれない。そして私たちもまた完全なコミュニケーションはとれない」という捉え方。もう一つは「シロクマは相互コミュニケーションがとれない。しかし私たちはコミュニケーションをとることができる」という反語に近い捉え方だ。一つ目の捉え方は、この部分から考える比較的一般的な捉え方と言えるだろう。相互コミュニケーションのとれないシロクマは何の為に生きているのかという問に対する主人の回答を、我々もまた然りだ、というニュアンスにとったものだ。二つ目の解釈はp134l15~p136l1を参考にしたものだ。その部分においてニミットは主人とジャズを聞いたことについて語っている。主人はジャズをニミットに聞かせる際、聞き所に関して言葉に依る具体的な指示を一切与えておらず、ニミットはそんな中でジャズを聴く。この部分でのジャズを聞くということは、言葉を介さない形のコミュニケーションひいては言葉を交わすことの代用とみることができる。つまり、表面的な言葉を介さずとも、深層に訴える意思疎通に近いようなことができるということが描かれているのだ。

　この二つの捉え方はそれぞれ筋が通っている。ということは、この文章は意図して二つの意味を取らせようとしていると考えるのが妥当であるといえるのではないだろうか。二つの意味を取らせることによって、表面的な言語によるコミュニケーションを否定しつつ、深層領域での意思疎通を推奨するような文章になっている。「完全なコミュニケーションはとれないが意思疎通はできる」というアンチノミーを示そうとしているのでは無いかと考える。

　以上このシロクマの場面より、本物のコミュニケーションをとる為には「言語に頼らず、深層領域での交流を目指すべき」であることが示されていると考えられる。このシロクマの場面についてももう一つ意図を有していると考えるが、それについては授業で一切触れていない自論であるため、次に説明する。

【自論】タイトルがタイランドなのはなぜか―隔離された場所の重要性

　この作品のタイトルは「タイランド」であるが、私はこれも謎の一つであると考えた。というのも、実際この作品の内容は「タイランド」でなくとも成立するのだ。私は「タイランド」で描かれている意味として「隔離された場所」が重要であるのではないかと考えた。

　この作品においては、多くの「隔離された場所」が描かれている。

　まずはタイランド。授業でも話題にあがっていた飛行機の場面の意味だが、私はタイランドが隔離されていることを強調しているのではないかと考えた。また、飛行機の場面で挟み込むことにより、タイに行った前後でのさつきの心境の変化をわかりやすくするという目的もあるのではないかと考えた。また余談だが、「神の子どもたちは皆踊る」は阪神淡路大震災の後に書かれたものであり、作中でも地震の話題が触れられている。タイは日本と違い地震が少ないため、対比の対象として書かれた可能性がある。

　次にウサギの夢だ（p129l4~8）。この夢は二つの隔離がみられる。まず一つ目はウサギが金網の中にいることだ。ウサギは孤独に金網の中という隔離された空間に残されている。二つ目は夢としての隔離だ。このウサギの話は夢の話である。つまり、現実とは隔離されているということにはならないだろうか。つまり、このウサギの夢は「階層構造の隔離」を含んでいるといえる。

　つづいてニミットが用意したプールだ（p130l1~p133l8）。このプールは周りを高い塀で囲まれており（＝隔離されており）、他の人影もなかった。そのなかでさつきは「何も考えない」「完璧な休息」を謳歌していた。この部分は明らかに他と違い、幻想的な描かれ方をしている。また、描写の所々に人工的な雰囲気が出ているように思える（p132l4~l5「小さな三角形にきれいにカットされた野菜とチーズのサンドイッチ」など）。

　次に大きな蛇の出てくる夢だ（p140l3~l9）。この夢は蛇が壁の穴から出てきて石を食べる、というものだが、「壁の穴から出てくる」ということは「壁によって隔離されている」ということである。さらに夢であるということから現実からも隔離されていると言える。さらにいってしまえば、これを話している老婆に会いにいった場所も、今まで描かれた場所と違った場所として描かれていた。また先ほど、この蛇の話からは生と死と夢についての論を導きだしたが、その中でも夢は「生と死の境界」と位置づけて話を進めた。これもまた一種の隔離であると言えるであろう。また、他の隔離と違って、唯一蛇が境界を破って侵入している。

　最後のシロクマの場面にしてもそうだ（p145l15~p146l15）。そこで出てくる凍てついた大地は人の立ち入らない隔離された場所を示していると考えられる。

　これらの「隔離された場所」を示す場面には共通点がある。それはそこにいるものが「孤独」とともにある、ということだ。タイランドにはさつきが一人で訪れているし、ウサギの夢ではウサギ一匹だけが金網の中に残されている。ニミットが用意したプールにはさつきしかいないし、蛇についても蛇を抑える自分しかいないと考えられる。シロクマに関しては本文中に孤独ということが明記されている。このように、この作品には「隔離」と「孤独」が強調されていることがわかる。ではこの「隔離」と「孤独」はなにを示しているのだろうか。

　私は「苦しみを取り除く為にはどうしたら良いか」に通じるものがあるのではないかと考える。先ほどは「苦しみを取り除く為にはそれ自体を認識の範囲外に置くことが必要である」と述べたが、「隔離」と「孤独」を考えることによって、その答えは深みを増していくことになる。

　まず、ウサギの夢について考えてみよう。さつきのみたウサギの夢はウサギを外から見ていたはずなのに、いつの間にか真っ暗な金網の中にとらわれてしまっていて、金網の中から暗闇の中に何かを認めることができる。金網の外の暗闇の中にいる何かが「あの男」だとすると、さつきが認識の範囲外におかなくてはならない苦しみに対して感じることがあることの暗示では無いだろうか。

　次にニミットの用意したプールについて考えてみよう。さつきはタイランドにすべてを忘れる為にきている。そして、ニミットのプールで完全な休息を謳歌するさつきは隔離された空間の中にいた。そして、場面自体が人工的なものとして描かれていた。つまりこの場面は、ニミットが意図してさつきの苦しみを認識外におこうとしたのではないかと考えられる。逆に言えば、石を抱えたままのさつきが、あえて石を高い壁で遮ってみないようにしているともとれる。

　そして、蛇の夢。前述した通りこの夢は唯一隔離が完全ではない。これは苦しみを人工的に壁を作って隔離するのではなく、無意識のうちに認識の範囲外へ押し出そうとする転機としての意味もあるのではないだろうか。

　つづいてシロクマについてだ。これに関してはシロクマそのものが何かの暗示と考えるよりも、苦しみから解放されようとしているさつきへ、凍てついた大地というさつきから隔離された場所・孤独を見せることによって、苦しみを捨てようとしているさつきを後押しするような効果があるのではないか。

　こうして「隔離」と「孤独」について追っていくと、蛇の夢やシロクマの話が必ずしも部分部分で意味をなすのではなく、一貫してさつきの心情の変化も表しているのではないかということがわかってくる。ここまで読み解けると、最初の飛行機の場面（p115l1~p118l4）において、ストレスにから来る更年期障害に悩まされていたさつきがタイランドを離れる際（p147l1~l6）には「座席に深くもたれ込み、両目を閉じた」とあるように、まるで無意識を受け入れるような心情になっていることについても説明できる。

　そして最後に「タイランド」という隔離。「タイランド」は飛行機のシーンによって隔離されているわけだが、すべての隔離の中でもっとも大きな隔離である。また唯一小説内の構造的な隔離である。実際に飛行機の場面の前後には行間が空いており、場面の切り替えを示していると考えられる。つまり、ここであげたような作品内のすべての隔離を内包していると言える。また、ウサギの夢や蛇の夢からもわかるようにここであげた隔離はすべて階層構造をなしているのだ。ここまで「タイランド」の下にある隔離についてみてきたが、さらにそれを内包する階層がある。それは「小説」の「現実」からの隔離である。そもそも小説という世界は現実から隔離されており、夢物語のようにみられることも多い。しかし、作者は隔離が隔離を包括する階層構造を小説に組み込むことによって、読者にこの作品で伝えたかった「苦しみを取り除く為にはどうしたら良いか」「本物のコミュニケーションをとる為にはどうしたら良いか」について、実際に実践できるということをも伝えようとしたのではないだろうか。